

紡績王から政治家、新聞人に転身した リベラリスト

むとう さんじ
武藤 山治 (1867－1934)

鐘淵紡績



『私の身の上話』
より

§ 人物データファイル

出生

慶応3年3月1日（1867）、父佐久間国三郎、母たねの長男として尾張国海部郡（現・愛知県愛西市）に生まれる。生家佐久間家は美濃国の豪農であり、代々庄屋を勤めたほどの旧家であった。父国三郎は学究肌で博覧強記の人物で、山治が生まれた折に論語を読んでいたため、名をそこから取ったといわれている。

山治は米国留学から帰った明治20年（1887）、一族中の武藤家を継いで改姓した。

生い立ち

山治の母たねは晩年、幼少期の山治を変わったところのある少年だったと述懐している。父親が来客と議論しているのを障子の陰から熱心に聞いていたり、父親が政治演説会へ行くのにいつも同行したりしたという。

明治14年（1881）14歳で上京し慶應義塾へ入学、福沢諭吉から直接薫陶を受ける。演説を会得したいとの思いが、当時演説館のあった慶應義塾入学の動機であった。同17年卒。

「水の流れと人の身の行く末ほど分らないものはありませぬ」で始まる自叙伝『私の身の上話』には、「子供の頃文学者になりたい」と思っていた、とある。父国三郎も、山治をケンブリッジ大学に入れ学問をさせようと考えていた。ところが明治14年からの物価暴落により当時の農村経済が惨状を極め、敷地内に礼拝堂や図書室を持つほどの豪農であった佐久間家もその波を避けることができず、山治が文学を学ぶべく英国留学のために蓄えていた費用も消えてしまう。

山治は18歳の明治18年（1885）、わずかの金を懐に米国へ渡ることとなった。苦学生としての渡米である。当初はサンフランシスコで煙草の見習工から始め、その後パシフィック大学にてその食堂給仕をしながら学ぶこととなった。住み込みで働きながら昼は学校へ通うという「スクール・ボーイ」として苦学した経験と、そこで触れた米国の文化は、彼の人間形成と進路に大きな影響を与えることになる。

実業家以前

明治20年（1887）帰朝、武藤は出資者を得て銀座で新聞広告取扱所を創設する。米国留学での経験からヒントを得たこの事業は、短期間に相当の成功を収めたという。日本における広告取次業の嚆矢であった。同時に博文雑誌社を開始。古い新聞・雑誌から興味ある記事を切り抜き、それに2、3の新しい記事を加えて編集出版するという着想の新しさから、これも意外な成功を見せた。この仕事の傍ら『米国移住論』を執筆し、丸善書舗から発行している。このなかで武藤は、米国に移民会社を設立すべきであると強く主張している。

同じ明治20年、横浜ジャパングゼット新聞社に翻訳記者として入社する。当時殆ど政府反対派としての立場を貫いていたこの外字新聞において、武藤は政治運動に携わっていった。

明治21年（1888）ドイツ人貿易商の経営するイリス商会に通訳として入り、明治25年（1892）まで勤務。翌26年に三井銀行に採用され、当時の銀行大改革の気運に触れる。明治27年、実質の経営を三井銀行のなかがわ中上川彦次郎に託されていたかねがふち鐘淵紡績（鐘紡）への転勤を命ぜられ、新設兵庫工場支配人に抜擢された。27歳の時である。武藤が一生の大半を費やすこととなった鐘紡時代の幕開けであった。

実業家時代

武藤は『私の身の上話』においてこう語っている。「当時我国の紡績業は誠に幼稚なもので、紡績技術の専門家などはなく紡績術に関する原書が一冊農商務省にあつたばかりといふような、俗に言ふ手探りで仕事をした時代であります」

鐘淵紡績の前身は明治19年（1886）創立の東京綿商社であるが、経営の失敗で三井家に出資を仰ぎ、同22年に改称することとなった。三井関係事業の1つとして整理されたわけである。鐘淵紡績が当時の関西の貿易会社の人々から「三井の道楽工場」「紡績大学校」とあだ名され嘲笑を受けていたのは、このためである。

武藤による鐘淵紡績の再建は、兵庫工場建設の任から始まった。武藤は昼夜を問わずこの任に力を注ぎ、初めの4、5年は1年365日一日も休まず働き通したという。

ところがこの鐘紡兵庫工場の経営は、ことに初期の運営においてトラブルの連続であった。『武藤山治の実像と業績』において植松忠博は、武藤が主に4つの困難に見舞われたとし、次のようにまとめている。まずは、芝浦製作所に発注した蒸気機関の完成が約半年も遅れたために、日清戦争時の好況期の操業に遅れそうになったこと。次いで職工の新規採用をめぐって、関西の紡績会社が加盟していた中央綿糸紡績業同盟会の各社との間に激しい紛争を引き起こしたこと。また明治33年（1900）の義和団事件（北清事変）にともなって発生した金融恐慌の際には、事業資金の不足をきたして経営危機にみまわれたこと。更には明治34年（1901）10月に中上川が急逝したため、三井が工業投資を縮小し、自己保有の鐘紡株を売却した際に、鐘紡株が相場師・鈴木久五郎すずききゅうの手にわたって、一時は武藤自身も総支配人辞職に追い込まれたこと（いわゆる鈴久事件である）。

殊に明治33年の義和団事件（北清事変）は日本の財界に一大騒動を起こすこととなるが、武藤もここで大変な苦しみを嘗め、後に振り返りこの期間を自らの受難時代と呼んでいる。

財政の立て直しに奮闘する傍ら、武藤は製品の改良とその宣伝に尽力する。この時期に武藤の採った宣伝の手法は、大変独創的なものであった。例えば人々に鐘紡糸の優秀性を示すため、鐘紡糸を入れた瀟洒な見本箱を全国問屋に発送し、実際に業者に触れてもらった。また、全国の織屋に向け「鐘紡製糸鐘印懸賞試験に関する規定」を発表し、他社製品との優劣を比較させた。その実験結果を集め、直ちに全国に向けて鐘紡糸の優秀であ

ることを発表してみせた。これらは業界に綿糸の真の値打ちを理解させ、鐘紡の糸の優位性を広く知らしめるために採った方法である。

更に武藤は、新聞紙上に鐘紡の広告を大々的に出していく。当時紡績会社が新聞紙上に広告を載せるなど異例のことであった。広告記事のみでなく、明治36年（1903）7月13日からの「時事新報」紙上に、「鐘紡の英断！過度なる操業時間の短縮」という記事を載せ、大量宣伝を開始した。自社の改革を新聞で広報したのである。武藤はこうして、独特の手法で鐘紡の名とその製品とを世に打ち出していった。

業績は次第に上がり、そこに日露戦争による収益増が重なったこともあり、事業に安定が見られるようになった。これを機に武藤は従業員の福利厚生の充実に着手する。明治35年（1902）に乳児保育所が、明治38年（1905）にはドイツの製鋼会社の職工に関する施設をモデルにして「鐘紡共済組合」が設立された。ここには退職金、傷病・死亡保険、妊娠中から産後までの様々な保証が盛り込まれ、後に多くの企業がこれに追随するような模範となる組合制度となった。

武藤の改革は続いた。米国の会社の方策に刺激を受け、「注意箱」の設置と社内報『鐘紡の気笛』の発行を開始した。前者は、会社のために有益な改革案を出した者に賞金を与えることを謳ったシステムである。

また社内報の発行は、多くの職員を使う鐘紡にとって有益な伝達・教育手段として働き、後には女工向けの『女子の友』の発行をも見ることとなった。前者は下意上達、後者は上意下達の制度として、バランス良く機能した。これらの制度に見られる方針こそは、鐘紡の「温情主義」「家族主義」と呼ばれる武藤の経営方針の一大特徴であった。

『私の身の上話』で自身を「非常に研究心が強く何をやってもじっとして現状で満足して居れぬ一種の性癖があります」と述べている武藤は、生涯自らの仕事の改良工夫に努め続けた人物であった。明治35年（1902）工場内に織布試験工場を設置し、ここでいち早く様々な研究を重ねさせた。これによる大きな成果が、蚕の発酵素で強力な精練剤を作った「ムターゼ」と、人絹（レーヨン）よりも上質とされた「鐘紡更生絹糸」の発見で

ある。これらは当時、鐘紡研究所における二大発見と呼ばれていた。武藤は工場経営者として発明の芽生えを最大限保護し、育てていく姿勢を通した。

明治39年（1906）の鈴久事件により一度は辞職に追い込まれた武藤が再び鐘紡に迎え入れられたのは、明治41年（1908）のことであった。復帰した武藤は経済界に大きな話題となる業績を残す。民間会社として初めての外資導入を英断したのである。それは当時の日本において破天荒なことであり、全国の新聞は一斉にこの問題を取り上げた。

武藤の手腕により鐘紡は経済界に不動の地位を占めることになり、大正の初めには紡績41社中の資本の半ばを占める、四大紡績の一つへと成長する。その業績は英国勢力を駆逐する勢いであった。

大正10年（1921）54歳で鐘淵紡績取締役社長に就任。昭和5年（1930）社長を辞任し、そのまま相談役に就任する。

政治との関わり

弟・時三郎が日露戦争に出征し、二〇三高地にて戦死した。その遺族扶助料が余りに少額なのに驚いたことから、困窮する多くの戦死者遺族救済のために熱心な軍人優遇運動を展開する。これにより社会主義者の注意人物とされ、憲兵に尾行されることもあったという。各所へ働きかけるもなかなか進展が見られず、とうとう事務所を設け法の立案に向けての動きをとった。漸く大正6年（1917）7月20日、「軍事救護法」発布。これがきっかけで武藤は、政治的立場の必要性を痛感する。

また中国関税引き上げ反対運動に加わり、大日本実業組合連合会を組織して委員長に就任、営業税反対運動を展開するなど、次第に政治運動への関与を深めていった。大正12年（1923）には他の組合を糾合して同志を募り、実業同志会（後の国民同志会）を結成、その会長に就任した。その翌年の大正13年（1924）には衆議院議員選挙に打って出る。この選挙で大阪より最高点当選、実業同志会は8議席を得た。武藤はその独自の雄弁でしばしば議会の焦点となっている。その後昭和5年（1930）まで、計4回の選挙を戦う。しかし理想の強い武藤への同調者は次第に減り、議員の数を

減らしていくこととなった。

武藤はこれを通じ、国民の政治意識を高めるべき政治教育の必要性を強く感じ、昭和7年（1932）政界を引退すると同時に社団法人国民會館を創設する。

社会・文化貢献

昭和7年（1932年）私財を投入して社団法人国民會館を設立（現会長は山治の孫・武藤治太）。国民の政治教育を目的とするさまざまな事業は、現在に至るまで続いている。

古美術収集家としての顔を持ち、横山大観^{はなぶさいちやう}、英一蝶、仏教美術（古写経、仏画、仏像）、与謝蕪村、尾形光琳^{けんざん}、尾形乾山などを好んで収集した。中でも大阪市立美術館（天王寺）にある武藤コレクションは有名である。向井潤吉、伊藤慶之助など若い芸術家を後援する一方で与謝蕪村に傾倒、蕪村研究の嚆矢ともなる『蕪村画集』を著している。蕪村最高傑作ともいわれる「夜色楼台雪万家図」^{やしよくろうだいゆきばんかのず}も、武藤が所蔵していた。

大正13年(1924)、ブラジル・パラ州の知事から日本政府に、移民による開拓の要請があった。これを受け鐘紡は昭和3年（1928）南米拓殖株式会社という移民推進会社を作り、ブラジル移民を進める。アマゾン川流域のトメアスという村に、最初の家族約200人が入植した。多くの困難の末、この地で胡椒が根付き大きな成功を収めるにいたった。トメアス文化協会の玄関には武藤の胸像が飾られている。

晩年

昭和7年（1932）、65歳で恩師福沢諭吉の創った時事新報社の経営を引き受ける。社は当時経営の危機に瀕していた。その紙上において武藤は当時の政財界の腐敗を突いていく。昭和9年（1934）の「番町会を暴く」キャンペーンである。

この帝人事件★から間もない昭和9年（1934）3月9日、路上で暴漢の狙撃を受け翌日死去。享年67歳。犯行の動機は尾久火葬場施設計画に関する個人的反感ではないかと思われたが、その場で自殺したため真相は謎のままである。余りに衝撃的な武藤の最期であった。

武藤山治は、兵庫県神戸市の舞子石谷山に眠る。

関係人物

福沢諭吉 啓蒙思想家、教育者、学者、著述家、「時事新報」創刊・発行者、慶應義塾創設者。山治は少年時代、著書『西洋事情』を入口に福沢の思想に傾倒していき、父国三郎の推薦で慶應義塾に進学、福沢の教えを受けることとなる。その思想は終生、山治の指針となった。

中上川彦次郎 実業家。福沢諭吉の甥にあたる。時事新報社社長、山陽鉄道創設時社長などを経て明治24年（1891）、福沢の要請を受け経営再建のため三井銀行並びに三井財閥の経営を担う。更に王子製紙、鐘淵紡績、芝浦製作所などを傘下に置き三井財閥の工業化を進めた。その推薦により武藤は明治26年（1893）三井銀行入社、翌年に当時の鐘淵兵庫分工場の支配人に着任する。中上川は武藤にとって、実業家としての出発点に重要な存在となった。学卒者はほぼ慶應出身者のみを採用し、藤山雷太や武藤ら有能な人材を育てた。明治34年（1901）47歳の若さで突然病死。

鈴木久五郎 株式相場師。通称鈴久。日露戦争中の株売買を契機に巨万の富を築き、成金と呼ばれる。昭和37年（1904）鐘紡の実質上の親会社である三井銀行が鐘紡株を手放したことにより、鈴木がその大半を買い占め武藤の経営を窮地に陥れることとなったが、その後の株価暴落により全財産を失った。

美濃部達吉 憲法学者、政治家。大正デモクラシーにおける代表的理論家として活躍する。武藤が日露戦争を経て軍事救護法の制定に動くに当たり法案の作成を依頼。わずか2週間で書き上げられ、大正3年（1914）12月の議会で提出された。

エピソード

武藤が設置した「注意函」は、当初の3ヵ月で計74通を数えた。中には無意味な内容や苦情もあったが、実際に採用された改善提案も少なくはない。例えば「消耗品請求上の手続きを省略する」提案は、熊本工場の一男工から出されたものである。この「注意函」を武藤は、時事新報社でも設

置した。

武藤は、社長室の壁に「朝日」「東京日日（毎日）」「読売」「時事新報」の4社の紙面を貼り、毎朝幹部を集めて記事の優劣を比較し合ったという。また、論説「思ふまま」を、自ら筆を執り毎刊に署名記事で連載した。毎日の執筆は不可能だという周囲からの声があったが、政治、外交などの時事問題から教育、芸術分野、果ては人生訓など、取り上げる内容は多岐にわたりそれらを分かりやすく綴り、読者ファンを増やしていった。

このようにして武藤は、生涯に8000ページを超える著書をもものした。また、政治経済の書物や英国の詩人キングズリーの詩やミルトンの翻訳など、翻訳家としての才も持つ。

キーワード

帝人事件 昭和9年（1934）に起こった帝人株をめぐる大疑獄事件。帝人造絹絲株式会社（帝人）の系列であった鈴木商店が恐慌で倒産したため、その株式22万株が台湾銀行の担保となった。元鈴木商店の金子直吉が鳩山一郎文部大臣や「番町会」に働きかけ11万株を買い戻すが、これと同時に帝人が増資を決定したため株価は大きく値上がり、株買受に関わった人々は大きな利益を受けた。この帝人株をめぐる贈収賄疑惑について武藤は昭和9年1月、「時事新報」に「番町界を暴く」と宣言した告発記事を掲載、筆誅を加えた。これが政財界に大きな波紋を呼び、武藤の死後、黒田英雄大蔵次官ら6名が収賄、三土忠造鉄道大臣が偽証罪、高木復亨帝人社長ら9名が背任・贈賄で計16名が起訴された。これにより政府批判が高まり、同年7月に斎藤実内閣は総辞職となる。ところが3年後の昭和12年（1937）の判決では贈収賄に関しその事実がないとし、全員無罪となった。

番町会の一員であった河合良成は昭和45年（1970）、『帝人事件 三十年目の証言』を著し、身の潔白を主張している。

神奈川との関わり

晩年の武藤は鎌倉郡大船町（現・鎌倉市）に住んでいた。東京への通勤のため北鎌倉駅へ向かう昭和9年（1934）3月9日朝、武藤は路上で凶弾

に倒れる。

§ 文献案内

著作

『蕪村画集』武藤山治編 審美書院 1922 〈未所蔵〉

『武藤山治百話』武藤山治著 大日本雄弁会講談社 1933 〈Y〉

『私の身の上話』武藤山治著 武藤金太 1934 〈K〉

これは武藤が雑誌『公民講座』に執筆し『婦人と生活』にも連載されたものを、昭和9年(1934)不慮の凶弾に倒れたため、急遽編纂して追悼記念のために非売品として上梓された。

『武藤山治全集』全8巻・増補 武藤山治著 新潮社 1963～1966

〈Y、K〉

『紡績大合同論』『政治一新論』『実業読本』『思うまま』等の膨大な量の原稿を全集としてまとめている。初著『米國移住論』は第1巻に収録。

社史

『鐘紡製糸四十年史』鐘紡四十年史編纂委員会 鐘淵紡績 1965 〈K〉

『鐘紡防府工場五十年史』鐘紡防府工場五十年史編集委員会 1985 〈K〉

『鐘紡百年史』鐘紡株式会社社史編纂室 鐘紡 1988 〈Y、K〉

昭和62年(1978)に創立百周年を迎えた記念事業の一環として発行された。

『鐘紡製紙四十年史』が「創業時代」から「再建時代」に至るまでを章立てしているのに比し、『百年史』では武藤の足跡が「武藤山治時代(明治二十七年～昭和五年)」として独立してまとめられている。

伝記文献

『武藤山治傳 武藤絲治傳』筒井芳太郎著 東洋書館 1957 〈Y、K〉

『武藤山治(一業一人伝)』有竹修二著 時事通信社 1962 〈Y、K〉

『武藤山治』入交好脩著 吉川弘文館 1964 〈Y、K〉

『武藤山治の経営革新(国民会館叢書9)』桑原哲也著 国民会館 1994
〈Y〉

『武藤山治の思想と実践（国民会館叢書8）』植松忠博著 国民会館
1994 〈Y〉

『武藤山治の実像と業績（国民会館叢書38）』武藤治太、矢沢永一、植松
忠博共著 国民会館 2001 〈Y〉

『武藤山治と時事新報（国民会館叢書53）』松田尚士著 国民会館 2004
〈Y〉

『武藤山治と芸術（国民会館叢書65）』武藤治太著 国民会館 2006 〈Y〉

『武藤山治の足跡（国民会館叢書70）』武藤治太著 国民会館 2007 〈Y〉

『武藤山治の先見性（国民会館叢書80）』武藤治太著 国民会館 2008 〈Y〉

『政治を改革する男 鐘紡の武藤山治（国民会館叢書82）』松田尚士著
国民会館 2009 〈Y〉

『武藤千世子の生涯と武藤絲治鐘紡社長誕生の経緯（国民会館叢書88）』
松田尚士著 国民会館 2011 〈Y〉

なお、正確な伝記ではないが、武藤を主人公とする戯曲に下記の2篇が
ある。

「北東の風」「千万人と雖も我行かん」『久板栄二郎戯曲集』久板栄二郎
著 テアトロ 1972 p72-138、p139-205 〈Y〉

¶ 参考文献

『アマゾンの歌 日本人の記録』角田房子著 毎日新聞社 1967 〈Y〉

ブラジルへの移民事業にまつわる苦闘と成功の物語を描いた小説である。こ
れをもとにフジテレビが「アマゾンの歌」というドラマを製作した（1979年10
月放映）。第1回移民の一人である主人公の山田義一役を仲代達矢が、武藤山
治役を滝沢修が演じている。

『帝人事件 三十三年目の証言』河合良成著 講談社 1970 〈Y〉

『わたしの合織回想録』佐藤渉著 出版文化社 1990 〈K〉

昭和21年（1946）鐘紡に入社し三大合織（ポリエステル、ナイロン、アクリ
ル）全ての事業化に取り組み昭和59年（1984）にはカネボウ化成株式会社社長、
その後相談役となった氏による、鐘紡技術者としての自分史である。

『カネボウの興亡 日本近代経営史の光と影』武藤治太、松田尚士共著
国民会館（新風書房発売） 2010（K）

<多田由紀江>

コラム 実業家の伝記小説①

2011年は安田財閥の基礎をつくり、銀行王、金融王などと呼ばれた安田善次郎の没後90年にあたる。そのためだろうか、前年の2010年に安田の伝記小説が相次いで出版された。

まず、7月に文藝春秋より渡辺房男著『儲けすぎた男』が、続いて11月には、月刊文庫「文蔵」に連載していたものをまとめた、江上剛著『成り上がり』がPHP研究所から出版された。意外なことに安田の伝記小説はほとんど無く、この2冊は実業家の伝記小説において収穫であろう。

伝記小説作家といえば、小島直記、城山三郎、邦光史郎などの名を挙げることができる。彼らは歴史上の人物を多く取り上げているが、実業家の伝記小説も残している。伝記と伝記小説はもちろん別のものであるが、史実を基にして、その人物の足跡をたどるという点では同じである。歩んだ人生をより鮮明に伝えるため、小説という形を採っているのである。ここでは、そんな伝記小説を紹介しよう。

小島直記には15巻を数える「伝記文学全集」があり、小林一三、益田孝、石橋正二郎など、多数の実業家を描いている。中でも余程気に入ったのか、電力の鬼と呼ばれた松永安左エ門については、何度も伝記を書いている。『まかり通る 電力の鬼・松永安左エ門』（毎日新聞社 1973）、『松永安左エ門の生涯』（「松永安左エ門伝」刊行会 1980）、『晩節の光景 松永安左エ門の生涯』（図書出版社 1990）という具合である。

城山三郎には、森コンツェルンの創始者である森^{のぶてる}麤昶を主人公にした『男たちの好日』（日本経済新聞社 1981）や渋沢栄一を描いた『雄気堂々 上・下』（新潮社 1972）、またダイエーの中内功の生涯を著した『価格破壊』（光文社 1979）などがある。